
明久と召喚獣と銀英伝

御根通久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明久と召喚獣と銀英伝

【Nコード】

N0295W

【作者名】

御根通久

【あらすじ】

かつて、銀河を舞台に駆け巡った英雄たちがいた。その者達がいなくなり、記憶から記録になり、宇宙が寿命を迎えて再び再編され——という話ではなく、単純にバカテス世界に記憶を保持して転生者達が生徒である明久やユリアン（民津）を中心として学園で教師として過ごすというストーリー！。

ブローグ1（前書き）

他が執筆できてなくて、息抜きにかいたのが量がたまったので投稿した。

今では割と反省していない。

というわけでブローグ開始

ブローグ1

穏やかな春の日差しが降り注ぐ四月初頭、その中を通行人は悠然とゆっくりと歩いている、こちらを

見ている視線が鬱陶しいのだが、それを甘んじて受けるしか無い身の上なのでため息をつきつつも受け入れる。

太陽は昨日よりも高い位置に陣取り、存在感をあらわにしつつ、僕たちの存在が異質だという事を知らせている。

つまり総合してどういう事なのかと言えば――

「遅刻だぞ吉井兄弟」

「珍しいな、民津君……もしかして提督なのかな？」

「兄さん、僕を置いていけば遅刻じゃなかったのに」

「少なくとも僕は弟をおいていくような薄情者ではないですよ」

筋肉隆々とした体格の良い教師――西村先生、通称鉄人に遅刻宣言をもらった。

隣ではシェーンコップ先生——通称不良中年先生が兄さんをからかうかのように笑っていた。

どうでもいいけど、兄さんもたまにいうのだけれど、なんでほとんどの知り合いが父さんの事を提督と呼ぶのだろうか。

——まあ、それはさておいて、遅刻である、身もふたもない言い方なのだが事実なのだから仕方がない。

僕が寝坊して、その僕を待つかのように………それもあるのだが父さんが遅かったせいでもあったりする。

母さんや兄さんの「せっかく軍人にならず念願の歴史学者になったのだから少しはしっかりしてください」と

ちょっと訳が分からない話が出てきていたりする二、三日に一度はそういうことが起こりうるのだが、わざわざ僕が

うっかりと寝坊するタイミングと合わせなくてもいいのに。

「遅れてすいませんでした、西村教師、シェーンコップ教官」

「すいません、僕が寝坊して兄さんを巻き込みました！鉄西村先生」

「吉井兄、礼儀正しすぎてこっちが申し訳なくなるからやめてく

れ、そして吉井弟、お前は言い直す努力はしろ

混ざってるぞ」

「手のかかる弟が二人か、民津も大変だな」

びしつと姿勢を丁寧に整えた兄さんが、これまたきれいな姿勢で反省を意味する角度で礼をする。

僕も真似しようと思ったけど、がちがちになりそうだったため、諦めて謝罪言葉だけを述べておく。

というか、なんでいつも先生の事を教師と呼ぶのだろうか。

おまけに、シェーンコップ先生の時だけ教官って呼ぶし。

ところで弟は僕しかないんだけど、弟二人ってどういうことなのだろうか。

「まあいい。ほら、クラス分けの封書だ」

「「ありがとうございます」」

今度は二人同時に行うように実行しておいた………こういうところは双子だとよく感心される。

とはいっても、他の面では大きな違いがあるんだけど今は割愛しておく、

勉強とかスポーツとかその他もろもろとかだけど割愛！

「それにしても二人とも災難だったな」

「いえ、父が助かっただけでも幸いだったのです。それに規則は規則ですから」

「僕はまだしも兄さんなら間違いなくAクラスだったのにね」

何せ、小学生……いやそれより前の頃から天才と呼ばれていてそれに見合うだけの能力を兼ね備えていた。

その頃の僕は少し家に居づらいのもあって、小学校の頃はそれぞれ別の小学校へ向かい、家でもほとんど話さなかった。

父さんも母さんも、厳しい方でもなかったけど、僕との距離をつかみ損ねているような感じだったし――

まあ、そんな事は大した話ではないので割愛しておき、兄さんが頭がいいのは周知の事実なので僕の評価は

世間の評価と寸分違わないはずなのだ。

「明久君、君もそんなに自分を卑下しない方がいいぞ。少なくとも見積もつても最終的にはDクラスには

入れる成績はとれていた筈なのだからな、西村先生の言葉だがね」

「西村教諭、珍しいですね明久をフォローするのは」

なん・・・・・・だと？兄さんの言うとおり、鉄人が僕をほめるなんてあるはずがない！

「さてはその西村先生はにせも——ゴブ!!？」

「何か言ったか？」

「——この容赦のなさ、本物だと理解しました」

横で兄さんが呆れた目で見ている、うん確かに僕が悪いので何にも言い返せない。

ちなみに僕も兄さんも封書を開けるまでもなく、自分のクラスがどこなのかを理解している。

とはいえ、見ない事には始まらないので痛む頭を押さえつつ封書を開ける。

吉井明久——Fクラス

吉井民津——Fクラス

わかっていたとはいえ、改めて目にとちよつと残念な気分になつてくる。

うわさで聞く限りじゃかなりの最低設備だからちよつと残念だ。

「追試の機会ぐらい設けても良かったのだが、連絡がなかったのが拙かった。それで説得も出来なかったしな」

「いえ、父の負傷に気が動転して忘れていた僕たちが悪いんです、罰だと思ってこの処遇をお受けいたします」

「気にかけて貰えるだけでもありがたいですよ」

第一、僕の立場が立場だ……ちよつと度が過ぎた馬鹿をやつて得た称号のおかげで、先生方から要注意人物として

完全にマークされている………兄さんの事でプラス評価したとしても覆せないような気がするから仕方がないだろう。

「僕の事が嫌いな先生方に、無理に好きになってもらおうとは思いませんし」

「ははは、少しぐらい愛想良くしても罰は当たらないものだがそれならしょうがないな」

きっぱりというと、隣で兄さんがぼそりと「やっぱり少しだけヤン提督の息子だって納得できますよ」ってつぶやいていたけど

——だから、ヤン提督って誰さ。

教室へ向かう途中、やっぱり気になってしまい、Aクラスの教室の方を覗き込んだ。

遅刻なのだからすぐに教室に向かわなければいけないのだが、それでも最高設備だと噂の

Aクラスを覗きたいという誘惑には勝てなかった。

「兄さん、これって教室？」

「どう控えめに見ても教室ではないですよ明久」

兄さんも仕方ないといいつつ律儀に僕に付き添って見ている。

もう遅刻は覆せない状況なのだからそのまま遅刻でも構わないという状況なのだろう。

「設備は………リクライニングシートにシステムデスク、個人用の冷蔵庫・お菓子棚・冷暖房装置」

「ノートパソコンに……個室ですね、これでは授業中に遊んでいても気が付かれにくいでしょうに……」

まあ、Aクラスに限って言えばそういう心配はなさそうですが

おまけに前方にはスクリーンまである状況だ。

……なるほど、豪華だ、だけどその分のしわ寄せが一つのクラスにあると考えるとどうにも感動するほどでも

無いと思い始めてくるから素敵だ、素敵すぎて涙が出始めてきた。

「あれは高橋先生か」

教室の前方に立ち、自己紹介を行っている女性教師を見る。

学年主任であり才女でもある女性教師。

やはり、最高ランクのクラスには最高ランクの先生がつくのは当たり前なのだろうか？

『私はこれから一年間、貴方達の担任となる高橋洋子です。よろしく願いたいします』

『『よろしく願いたいします』』

先生の言葉に堂々と一斉に返事を返すAクラスの生徒達。

うん、声からして真面目であるというのが丸わかりだ。

とはいえ、ちらほらと去年も一緒であり共にバカをやった生徒達の

姿も見えるので

その推測は間違っているのかもしれないのだが。

「そろそろ行きましょう、明久」

「え？うん、そうだね」

最後に学年主席の男子生徒が壇上に上がったのを見て、僕と兄さんは自分たちの

クラスであるFクラスへと歩いて向かっていった。

何故だかしらないけど、兄さんの一人の男子生徒を見る目が少しだけ厳しかったのが印象的だった。

他のクラスもちろりちらりと見ているのだが、どんどんと階級が下がっているのがわかるほどに、

感覚的に普通の教室に見え始めてきた。

そして、目の前に見え始めてきた怪しげなクラスを現実逃避するかのように僕はEクラスの前で立ち止まった。

「兄さん、急に山の中で忘れられているような山荘が見えてきたんだけど、幻覚だよね？」

「明久、これは幻覚なんかじゃないですよ。現実を見つめてください」

兄さんの言う事に、絶望しつつ勇気を出して向かっている状態で一人のさえない男性が目映った。

少々重たそうな机を持ちながらゆっくりと歩いていたのだ。

それに気が付いた兄さんが少し早足気味に駆け寄っていく。

「福原教諭、手伝いましょうか？」

「ああ、吉井民津君か……。そうだね遅刻の罰としてお願いしておこうかな？」

そういつて「この教卓をお願いいたしますね？」と言い、兄さんに教卓を渡す福原先生。

手伝おうと思ったけど、一人で十分らしくしつかりとした足取りでボロ小屋——Fクラスに入っていく。

とりあえずぼうつとしているのも阿呆でしかないので後をついていく。

——中は想像以上に酷かった……。山小屋ではなく廃屋の方が正しい表現だろう。

しかもほとんどが男子であり、その酷さを際立たせている。

『ちょっと待て！？なんで吉井兄がFクラスに！？』

『いやいや、よく見てみる教卓を運んでいるじゃないか。ただ単に手伝いを行っているだけだろう』

『そうだな、これ以上Aクラスじゃないとおかしい生徒が紛れ込むのもおかしいしな』

僕は無視かい！ん？Aクラスでないとおかしい生徒？

その声を聴いて僕は教室を見渡す……。雄二と目が合った……。確かにAクラスは堅苦しそうだった。

言ってたから、居るのは問題無い筈。

続いて姫路さんを見かけた………確か体が弱いと聞いた事があるから、大方振り分け試験中に参加できずに

Fクラスになってしまったのかな？ だとすればかなり可哀想だ………後はカリンさん

………大方、兄さんと同じクラスになりに来たんだろう………そして………うん、以上だね。

他には誰もいない、日本人形みたいな美少女なんて見当たらないんだ！！

「明久、目を逸らそうとするな」

「黙れ雄二！ありえない要素なんてあるはずないじゃないか！！？」

そう、僕は何も見ちゃいないんだ！誰も近づこうとせずにはっきりと空いているスペースにいる黒髪の美少女なんか！

他のところもそうだけどあそこだけは別格の空間スペースだよ！？

斜め前にはカリンさんが居座ってるけれど、それでも異常な状況だ。

ほぼ特等席状態だよ！？——落ち着け僕！他に空いている席は——

——卓袱台は——前と横で既に前は——

兄さんが座ってる——————！！！！？く、こうなれば——

「みんな、なんで座らないんだ！」

『座りづらいわ————！！お近づきになりたいけど無理に決まってるだろうが————！！』

おい！去年のような怪しげな集団はどうした！？商会を利用してる勢力はどうした！！？

全員ヘタレだとは思わなかった、よし僕は男らしく他に空いてる卓袱台を——あつた！先生の目のま

『手が滑った————！！！！』

『みなさん、学校の備品を壊さないでください』

「他に人いたんじゃないの！！？というか遅れてるだけで来るんじゃないの！！？」

でも、福原先生はそのあと名簿を確認しだして、卓袱台が一つ多か
ったですねなんてのたまりやがった！

SHIT！違う、これは罨だ！。明の罨に違いない！おのれ、違う
国で違う時代のの僕にまで罨を

仕掛けてくるとは、なんて暇人なんだ！そんな暇があるなら国力を
もっと固めておけよ！！

「明久、諦めて座りなさい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

カリンに言われ席の方を見ると霧島さんがジッとこちらを見ている
ような気がする。

「待て落ち着け。これは妨害されるフラグが――」

「あると思うのか？」

確かに女子の近くに座りたいのだろうが、物静かな雰囲気は災い？

して誰も座る勇気を持てなかったのだろうか。

つまり、クラス中の人間にとって僕はある意味スケープゴートの立場なのだろう。

「うん、もうあきらめるよ」

なんでこの場にいるのかはおいておいて、僕は翔子ちゃんの席の横に座った。

「・・・・・・・・・・よろしく、明久」

「うん」

さんざん拒否しておいてあれだけど、横が翔子ちゃんなのは幸運な事だったかな？

ブローグ1（後書き）

銀英サイドの人間はほとんどが教師です。

次回投稿は三日以内を目標としておきます・・・
明×翔
復活！

プロローグ2（前書き）

あまり原作乖離は無いけど（え）

気にしない気にしない。

考えてみたらAクラスが勝つヴィジョンが見えないんだけどどうしよう。

ブローグ2

僕が座つたと同時に自己紹介が開始される。

欠席の連絡がなかったために一応、全員がそろつまでは自己紹介を行う事はしなかったようだった。

まあ、一応名前だけは把握しておきたかったのでありがたいといえ
ばありがたいのだけでも。

「それでは改めましておはようございます。Fクラスの担任を務
める事になりました、

福原慎です。皆様、よろしく願います」

さっきまでチヨークなかったのよ？と小声でカリンがつぶやいてい
た。

教卓が壊れたというのもちよつと残骸があつて確認出来たのだが、
改めてひどい状況だ。

勉強させる気があるのかどうかを疑う環境じゃないか、バカだから
どうでもいいとでもいうのだろうか？

「では、廊下の方からお願いしますね」

その言葉を受けて返事をして一人の男子生徒が立ち上がった。

男子生徒と呼ぶにはちょっと疑問が浮かぶ容姿ではあるのだがちゃんとした男子である。

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる。今年1年、よろしく頼むぞい」

ちよつと特徴的な言葉遣いだけど、爺言葉の方が男に見られやすいとの事らしい。

まあ、秀吉以外にも女顔の生徒はチラホラいるし、そこまで大きな誤解はないけれど男の比率が大きい教室だと

相対的に男に見られるのが大きそうではある。

ちなみに前の学年でよくつるんでた一人であり、僕の友達だ。

秀吉が軽く会釈して座り込むと、後ろの男子生徒が立ち上がる。

「……………土屋康太」

そう言って座り込んでしまった。

もっと他にも紹介は有った筈なのに、たったそれだけで済ませるのはどうかと思うよ。

ちなみに先ほどの土屋も友達の人だ、ついでに言えば異名であるムツツリー二の名の方が

割と知られている存在だけどあまり正体が知れ渡ってない。

「島田美波です、ドイツから来ました」

去年一緒に生徒ばっかりだなーと、思いながら自己紹介を聞いているのだけでも、また知ってる人だ。

数少ない女子の一人で、帰国子女……まあ、ドイツ出身の知り合いが大勢居たから（ほとんど大人だけだ）

最初は下手だったけどドイツ語で話しかけて、それがきっかけで仲良くなつた友人だ。

「趣味はよ———つとの写真集めです」

急に言葉を止めた理由を知りたい、しかも冷や汗がたらたら流れているし。

というかヨツトの写真を集めるのが趣味だなんてちよつと変わってるなー。

兄さんとカリンから呆れ気味に同じ人物の名前がポソリと漏れてきたのは気のせいだと思いたい。

その後、いろいろな紹介が出てきたけど、とうとう一人の女子生徒が当たり――

「姫路瑞希です。えーっと、みなさんの疑問に先に答えておきますと……

テストの日に熱が出てしまったためです。後は、少し手違いがあったせいで無断欠席に

なってしまったために、Fクラス在籍になりました」

ああ、やっぱり体調が悪かったんだ。

途中退出はまだしもずっと継続して試験を受けないとなると完全に0点扱いだからしょうがないといえば

しょうがないのだけど、事情が事情だから誰かしら試験を監督してくれそうな先生しかいないと

思うのだけれど……特にキルヒアイス先生とか、マリィンドルフ先生とかミユラー先生とか。

あれ？今更ながら日本の学校なのに日本人じゃなくてドイツ出身の先生が多いぞ！！？

「カーテローゼ・フォン・シェーンコップ。父の仕事の都合で日本に来ました。

後、私はユ——民津の恋人なので無駄です」

そうやって思考の海に沈んでいると、僕の目の前のカリンが自己紹介していた。

留学生だけど留学生じゃない生徒だ、どうせ将来的には日本国籍を取っちゃうだろうしね。

『あの不良中年先生の娘、だと……？』

『ちくしょう、絵になりすぎて嫉妬する気もおきねー』

というか、去年も同じクラスに居たのも居た筈なのに、親子関係であることを忘れている生徒がいることに驚いた。

それはさておき、兄さんの恋人っていう事を強調しなくてもいいと思うんだけど、案の定男子が殺気だつてないよ！？

絵になりすぎて嫉妬する気も起きないってどういうことなの？

「つと、僕の番か。吉井明久です。えーっと気軽にダーリンと呼んで「……ダーリン」

翔子ちゃん!!?」

なんとというタイミングで割り込んできたんだ!!?クラス中の男子の悪乗りを期待してたのに!

ほら、教室中で殺気が沸き起こったきたじゃないか!!容姿的に釣り合わないから嫉妬の気が大きいよ!!

というか嫉妬するぐらいなら席確保しておけばいいじゃないか!!!

「須川亮です、よ——しむねの写真収集が趣味です」

「近藤歳三です、よ——うかいの資料集めが趣味です」

クラスで”よ”で止める事が流行っているのだろうか?

心なしかちょっと翔子ちゃんの周辺から何か怖い感情が漏れ出しているのだけれど、

気のせいだろうねきっと。いつもの通りあまり表情に出てないし。

「吉井民津です、尊敬する者は父です」

正直、父さんのどこに尊敬する要素があるのだろうか？まあ、悪い父親じゃないって事だけは

わかるんだけど、尊敬するかどうかで聞かれたら微妙としか答えようがないんだよね。

むしろ僕としては過去にいろいろあったけど兄さんの方が尊敬できるんだけども。

「…………霧島翔子、趣味は花嫁修業。このクラスに所属したのはテストにすっかり名前を

書き忘れたから」

それは趣味とは言わないと思うのは僕だけじゃ無い筈。

しかも書き忘れたって言うのは絶対嘘だ、嘘に違いない。

というか相手はいいたい……………これまでの行動を考えて僕だよね、やっぱり。

でも口に出して言ったら周りが怖そうなので自重しよう、うん。

「このクラスの代表の坂本雄二だ」

雄二が代表？まあ、点数を調整したんだろうけどよく調整できたよね。

イレギュラーがたくさんあった（兄さん・姫路さん・翔子ちゃん）
筈なのに。

「全員に聞きたい」

何やら演説が始まった。

……一瞬、こっちを見たという事は、何か面白いことをやるうとしているのはわかってるけど。

「Aクラスはリクライニングシート、対してこっちは綿がろくに
入っていない座布団。」

Aクラスはシステムデスクで、対してこっちは脚が折れやすい
卓袱台。

Aクラスは空調設備完備で清潔、対してこっちは窓が大破して
いる有様でかび臭い。

さて、この三点だけ挙げてみたが——不満はないか」

確かに、というか良心的な先生方なら流石に健康に害をもたらす様な現状をどうにかしようと

思っのが普通だと思っただけど。

「……男子が少しふざけてキャッチボールで割ってた」

原因判明した、窓が割れてるのは今日からだったのか。

「そこで代表としての提案になるのだが——FクラスはAクラスに対し

『試験召喚戦争』を仕掛けようと思っ！」

話をほとんど聞いてなかったけど、雄二が宣言をしていた……まあ、普通に考えたら勝算はあるよね。

学年TOP3が三人ともクラスにいるんだから。

「勝てるわけがない！」

「これ以上設備が落とされるなんて嫌だ！」

「下克上か……… よろしい、本懐である！」

「姫路さんが居たら何もいらない！」

「霧島さんがいればそれだけでいい！」

とはいえ、分かってないのもいるのか、ドンドン否定意見が出てくる。

負ければ更に酷い設備（健康を害さない程度）になるのだから当然と言えば当然だろうけどね。

ついでにラブコールまで……… っておい！今翔子ちゃんに送った奴は誰だ！？

「皆がそう思うのも無理はないだろう。だがな、このクラスには、勝てる要素がきつちり揃っているからこそその発案だ。今からそれを説明してやる。」

「というか少なくとも三人に関しては気付いて欲しかったんだが」

「三人は言うまでもなく兄さん・翔子ちゃん・姫路さんだろう………。」

目先の事だけに食いつくなんてなんて馬鹿なんだ！

「おい、康太。いつまでも姫路のスカートの中をのぞいてないで、前に出てこい」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわ！？」

恥も外聞もなく、低姿勢からの覗きこみの体勢を指摘され——誰
も気がついてなかったんだ——

必死に顔と手を振って否定し始める康太。

顔に付いた明らかな覗きの証拠である畳の痕手で隠しつつ、前に出ていく。

どういう観点から見てもバレバレなのに必死に隠す様はいつそ清
しいように思えるけど往生際が悪いだけだよ康太。

「紹介しよう。こいつがあ有名なムツリーニだ」

「……………！！（ブンブン）」

ムツツリー二と言う名に、クラスがざわめいた。

その渾名は男子から畏怖と畏敬を、女子からは軽蔑を持ってあげられており、その正体は謎とされていた。

んだけど、その謎の人物は目の前にいる……明らかな証拠を隠しつつ首を左右に振りながら。

「バカな、奴がそうだと言うのか？」

「だが見ろ、いまだ必死に手で押さえて隠そうとしてるぞ？」

「ああ、ムツツリの名に恥じない姿だ」

「往生際が悪いだけでしょ」

カリンのつつこみももつともだけど誰も聞いていない。

そんな状況の中、姫路さんはムツツリー二の事を知らないのか首を傾げていた。

出来ればそのまま置いて欲しい。

「姫路・民津・翔子の事は説明するまでもないだろう。皆だつてその力は知ってるはずだ」

「えっ？ わつ、私ですかっ！？」

（総合力では負けてますけどね）

「……普通は気がつくもの」

その容姿と共に知られている三人の成績を考えれば、もっともな話だけだね……

つくづく兄さんと僕のDNAが似ているのかどうかを疑うよ。

「そうだ、俺達には姫路さんや吉井兄と霧島さんが居るんだつた！」

「彼女達と奴なら、Aクラスにも引けを取らない」

「ああ。姫路さんが居れば何もいらない」

さっきからラブコールを送ってるのは一体誰なんだ、そして翔子ち

やんに向けてた奴は

声を潜めたのか聞こえない……あれ？なんで僕は怒ってるんだろうか。

「木下秀吉やカーテローゼだっているし、俺も当然全力を尽くす」

次に、学力面ではあまり凄い噂は聞かないものの、優等生である双子の姉と

演劇部のホープという要素で有名な人物である秀吉の名前を挙げる。

カリンもTOP10には入らないものの十分Aクラスに入る成績の持ち主だ。

そして雄二自身もまた、代表として名乗りを上げていた。

「坂本って、確か小学生のころは神童とか呼ばれてなかったか？」

「それじゃあ、実力はAクラスレベルが5人も居るってことかよ？もしかしたら、やれるんじゃないか？」

「ああ、なんかやれそうな気がしてきた！」

単純に質はまだしも量で敗北してるって事に気がついてないのかな？
まあ、今そういう事を言う空気じゃないし、同時に戦意をくじくのも駄目だしね。

あ、でも雄二の事だから僕をオチに使ってくる可能性が――

「よし、須川。Dクラスに宣戦布告に向かって来い」

「任せろ――！」

あれ？オチは？

「士気を潰すのは戦略としてOUIだ。潰さなくても勝てるが後が怖い」

僕の心の声を読んだかのように雄二が呟いていた。

後が怖いってどういう事なんだろう？

プロローグ2（後書き）

教師にドイツ出身者が多いでござるの巻。

ちなみに教頭は義眼の人……ヤベーノハキノセイダヨキット

ではまた次回。

VSDクラス戦の前（前書き）

遅まきながら投稿！

VSDクラス戦の前

「須川が午後開始だと伝えてくれたぞ」

そのしばらくの後、須川君が教室に息も絶え絶えに転がり込んだ。
た。

Dクラスにつかみかかれ、ぼろぼろになった姿を見た雄二は遺言
(死んでないけど)を聞いた後で

こっちに話を持ってきた……ちゃんと手当てするように命令は伝
達してたけどひどい事には変わりが無い。

「いくら風習とはいえやりすぎではないですか？あれは」

「まあ、下級クラスからの宣戦布告は却下できないからな。

それにFクラスという最低設備になる可能性もあるから、あそ
こまで過剰な攻撃に出たんだろうさ」

兄さんの言葉に対して雄二が返事を返す。

確かに上級クラスからの宣戦布告は却下できるけど、その逆は出来

ないんだよね。

それを考えたら苛立ちをぶつけるのも分かるんだけど……やっぱり
おかしい気が。

「負けるかもしれないという恐れからの暴力か、ひどいわね」

「まあ、あれだ。自信が無いってだけなんだろうな」

まあ、そりゃあ……学年三トップが揃ってFクラスに居るし自信
がなくなっても仕方が無い状況だろうけど。

考えてみたら、真っ向勝負一対一で確実に勝算があるのって翔子
ちゃん、雄二、

姫路さん、カリン、兄さんの五人だけ……十分多いか。

後は、強化限定するのであれば康太も居る事だし……と、ここまで
考えていると、雄二が僕の

思考を読み取ったのか……………。

「クラス代表となった俺ならまだしも、他の四人はまだばれてな
いと思うぞ？」

後はAクラス連中が気がついていいる可能性があるんだが」

「え」

「明久よ、考えても見るのじゃ。普通に考えて一人ならまだしも、五人ものAクラス成績者が

Fクラスに行っているなんて考えもつかんじゃろ」

「ああ、固定観念か」

秀吉に指摘されてようやく気がついた……僕達は同じクラスだからその存在を知れたと

言うだけで、実際には高得点保持者が何人もFクラスに在籍しているなんて夢にも思わないはずなんだ。

「じゃ、今から屋上でミーティングをするぞ」

「屋上ねえ……………」

と言う雄二の言葉に従い、主要メンバーとして紹介された面々とおまけで僕と島田さんが

屋上へと向かう……時間的にお昼だろうから弁当箱を取り出して持っていくのも忘れる事は無い。

……確認してみたらサンドイッチだった、母さんは挟む料理が大の得意だったつけ、

他の料理も食べられない事も無いけど兄さんの方が遥かに上だった。家事の能力を比較してみると

兄さん>>僕>母さん(料理が並)>>>>>>越えられない壁>>>父さん

こんな感じだ……正直、父さんが結婚するまでどうやって過ごしていたのか非常に気になる。

そして、屋上にて。

「明久、お袋さんの弁当か？」

「母さんの料理が恋しい時ぐらいあるよ」

サンドイッチを取り出した瞬間、一発で母さんが作った料理だと確信したのか、言ってくる雄二に

言葉を返しておく……母さんだって挟む料理以外にも作れるんだよ、毎晩兄さんに

教えてもらいながら——兄さんは何処で料理を習ったのだろうか。

けど、何故か今日に限って量が少ないんだよね……隣の家の人がお母さんに何か言ったらしいんだけど。

「……明久」

「え？翔子ちゃん？？」

呼ばれた声に振り向いてみると翔子ちゃんが包みを二つ持っていて、そのうちの一つを差し出してきていた。

「ああ、そういえばキャゼルヌ夫人と母さんが何か会話してたっけ」

「オマケに翔子さんにも何か話してたのよね」

兄さんとカリンの小声の会話が聞こえてきた……何故だろう、物凄い殺気が二箇所から放たれているんだけど。

あ、姫路さんも真似して雄二に弁当を渡してる……眉間を揉んでるけどどうしたんだろう雄二は。

人によっては物凄く羨ましい位置に立ってるって言つのに……
…あ、殺気が一つだけ別方向に移った。

「妙な薬品は入れてないよな……」

「え？入れてませんよ」

マテ雄二、何で弁当の話で薬品の話が出てくるんだ……呟いている塩酸とか硫酸とかの話が

表情から察するに冗談では無さそうなのが非常に怖い。

「それじゃ雑談はここまでにして、そろそろ本題に入ろう」

姫路さんの弁当から半ば逃げるようにして雄二が発言するけど……
皆、口に物を入れている状態だったので

誰も会話できる状態じゃなかった。

口に物を入れて喋るなって兄さんに散々言われたしね……とりあえず雄二が哀れになったのか、みんな

多少食事のペースを速めて、持参していたのみものを少し飲んでから一息ついて（この間10分ぐらいかな？）。

「ああ、そうだね」

「気になっておったのじゃが、なぜDクラスなのじゃ？」

まず真っ先に、秀吉が疑念をぶつけた。

それもそうだね、段階を踏んでいくならEクラスが妥当だろうし、目的はAなのだから

一気に行くのであればAクラスに宣戦布告をした方が手っ取り早い

に違いない。

「簡単だ。明久、周りを見てみる」

「えっと……器用万能一人と美少女三人とゴリラが一人とムッツリが一人にバカが三人だね」

ちなみにバカには僕も含まれている。

「待つんじゃ明久よ、ワシはバカに含まれておるのか？」

「え……この中では比較的そうじゃない？成績面だと」

「比較対象が物凄くおかしいのだけれど……！？」

自分もバカに含まれたと理解した秀吉と島田さんが否定できないのか頂垂れていた。

ここまではまだよかったんだけど……

「確かにシェーンコップ教官に追いつけるほどの武勇ですけどゴリラとは侵害ですね明久」

「なんで兄さんがゴリラに反応しちゃうの！！？」

「明久、お前が俺をムツツリ扱いしてるとは思わなかったぞ……」

「いやいやいや、雄二はムツツリじゃないでしょ！？微妙にオーブン気味でしょ！！？」

「なんだか爆弾発言をしたような気がするけど物凄く気のせいだ……
…非常に気のせいだ。」

「……私はバカじゃない」

「まって！バカ枠の最後を埋めないで！？僕の枠がおかしいのし
か残らないから！！？」

「………ぽ」

「康太、おまえもか！！？」

よりもよって何で美少女枠を取った康太！！？不味い、突込みが追いつかない。

兄さんがたまにする悪乗りには皆便乗するなんて！！？……そういえば、あんまり器用万能呼ばわりが

好きじゃないって言ってたよね兄さん。

「成程。つまりこれは、最初のステップというわけですね？」

そんな事とは裏腹に兄さんが雄二に確認を取っていた。

「ああ。ここにいるメンバーは最強だ、お前達が俺を信じて協力してくれるなら勝てる！信じなくても勝てるがな」

雄二の確信した表情による言葉に、全員が頷いた。

でも、最後の最後で台無しだよ雄二……………

VSDクラス戦の前（後書き）

中々時間が取れない上に前のようになくなってきていた。

……どうしましょうか

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0295w/>

明久と召喚獣と銀英伝

2011年9月19日12時05分発行